

資料紹介・展示記録 永澤家文書に見る近代水道の夜明け

大崎市教育委員会文化財課

菊地 優子

鈴木佐知子

1. はじめに

大崎市教育委員会文化財課では、大崎市図書館にある郷土資料の展示ブースにおいて種々の文化財を展示紹介しています。1年のうちで4種の展示を3ヵ月ほどずつ行っていますが、そのうちの1期間は古文書の新発見資料に基づいた地域の歴史を紹介しています。令和4年(2022)1月17日から4月18日には、「永澤家文書に見る近代水道の夜明け」と題した展示を行いました。前年の永澤家文書調査で貴重な資料を発見したことによる急遽の紹介展示でしたが、各方面から注目をいただきました。今回は、その展示発表をもとに、新たに原稿を書き加えて資料紹介を行います。



永澤家文書展示風景（大崎市図書館）

2. 古川水道の父「永澤才吉」を輩出した永澤家

明治初期、古川では良質な飲料水に恵まれず、コレラなどの伝染病に悩まされていました。地域の人々を救うため、日本でも1、2の古い歴史を誇る水道の敷設事業に尽力した永澤才吉は、「古川水道の父」「恩人」と形容されています。

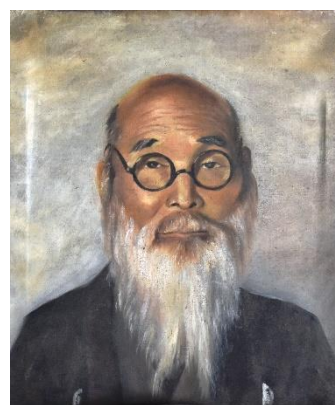
才吉を輩出した永澤家は近世からの商家であり、『東講商人鑑（あずまこうあきんどかがみ）』（安政2・1855年刊）の「仙台領分志田郡古河町諸商人細見」には古河町のうち七日町で太物・水油・古手を扱う商人として「永澤屋清蔵」の名が見えます。古河町（古川町）というのは、江戸時代に奥州街道沿いに設けられた宿場町で、慶長9年(1604)に町立てされ、三日町・七日町・十日町の三か町が置かれた、とあります(『古川市史第1巻通史編1』「近世 古川町」)。永澤家は七日町にあり、前掲『古川市史』の「近世の古川町」の図には、七日町の南側商家の並びのうち、十日町寄りの場所に「永澤屋」が描かれています。この場所は大崎市民には「永沢パーキング」として馴染みがある場所です

が、江戸時代から続く永澤屋の店舗は早くから閉じていたようです。現在、永澤屋の商いや暮らしの様子を知る古文書は残されておらず、系図も確認できませんでした。

『志田郡沿革史』などを引用して編まれた菊田定郷編著『仙臺人名大辞書』（昭和7年・1932）によれば、永澤才吉の父は駒蔵といい、永澤彦七より分かれた家で、彦七家が破産しそうになったところを救った、と書かれてあります。詳細は不明ですが、彦七家が永澤本家で、駒蔵家が分家と思われます。駒蔵は事業に成功して、天保の大飢饉の際には米穀を窮民に与えて多くの人を救済し、肝入として天保3年（1832）に古川町で60文、大柿村で5文の土地を下賜された、とのことでした。

才吉について、『古川市水道100年の歩み』には、「天保11年（1840）6月に生まれた。生家は呉服丹(ママ)物商を営む、この地方の素封家であった。才吉は若いころから意に決すると後へはひかず、猛進奮闘型で、明治7年（1874）2月、組合伍長に挙げられ、公私の業務に精励、官民の間にその名が知られた。明治14年9月、村会議員に選ばれ、翌年12月には、古川村、中里村、稲葉村、大柿村の古川外三村公選戸長となった。この時44歳」と書かれています。明治15年にコレラが大発生した時に、病原は飲料水にあるとして水道工事の必要を説き、私財を投じて設計を求め、さらに費用捻出のために「水工会」という頼母子講を組織して基金を創り、反対住民の暴動の中で断固として水道敷設事業の推進にあたった、とありました。

さらに明治19年には電信局設置にも携わっています。昭和11年（1936）1月28日、97歳で死去しました。



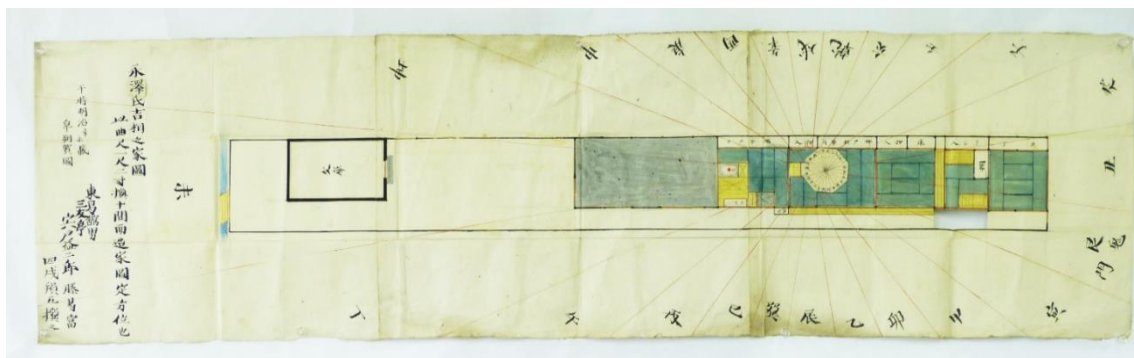
「永澤才吉肖像画」永澤家
文書

2、永澤家文書発見の経緯

平成23年（2011）年3月11日の東日本大震災で大きな痛手を被った大崎市古川の七日町は、かつては奥州街道の宿場町として栄え、明治以降も宮城県北の中核となる商業地域として賑わってきました。しかし、大震災以後に七日町の旧御仮屋跡に災害公営住宅が建造されると、商業地域の中に一気に居住空間が広がり始めました。平成25年（2013）から、「大崎市中心市街地復興まちづくり計画」が策定され、大崎市の中心市街地の中核として商住共存の街づくりが進められることになりました。令和4年（2022）3月に事業は竣工し、4月より新たな七日町がスタートしました。

この事業により、当該地区の古い商家や蔵は解体、または移転することになりました。そのうち永澤才吉家は、七日町通り沿いから南側の川端にかけての細長い敷地内に住まい

と蔵がありました。住居はすでに残っていませんでしたが、令和2年4月に敷地内にある土蔵を解体することになり、3月に親族から文化財課に確認調査の依頼がありました。



「永澤氏吉相之家図」明治辛未（4年）永澤家文書
図の右手が七日町に面した店舗および住まい、左手が川端に面した奥で、図中の「文庫」が今回調査した蔵と考えられる。



4月7日に所蔵者の永澤氏とご親族立ち会いのもと土蔵を開け、内部を確認したところ、写真のような生活用具や掛け軸類、古文書などが入っていました。母屋が無人となつてからだいぶ年数が経過していたこともあり、蔵は埃をかぶった状態にありました。永澤家のご厚意で寄贈していただくことになった古文書・民具類はいったん大崎市教育委員会文化財課の整理室に運び、埃を払いながら内容確認をして、現状を撮影しました。このうち古文書類については、市内で活動をしている岩出山古文書を読む会に整理作業への協力を依頼し、1点ずつ封筒に入れ、表題を付けて、目録を作成しました。

3、調査で分かったこと

寄贈を受けた資料は民具・軸物を含めて608点です。そのうち、軸物を除く文書類は549点ありました。文書類については江戸末期から昭和にかけての明治の地主・小作関係、志田郡古川戸長役場関係、古川町関係文書など多くの文書が遺されていました。往来物や文芸書・辞典類には江戸時代に発行されたものも含まれていました。これらは目録の作成と写真撮影が完了し、将来の大崎市史編さんや地域の歴史を知るための資料として、大崎市で保管をしています。

さて、今回の古文書発見は、文書の重要性という点からも貴重ではあったのですが、これまでの調査の盲点や近代文書の埋没という点にも驚きがありました。古川の水道敷設事業については『古川市史水道100年のあゆみ』『古川市史第2巻通史II』などで詳述されており、関係各所に水道の歴史を記した看板も建てられていて、日本で2番目と謳われた水道敷設事業が旧古川市民にとっていかに誇りであったかを感じさせられます。

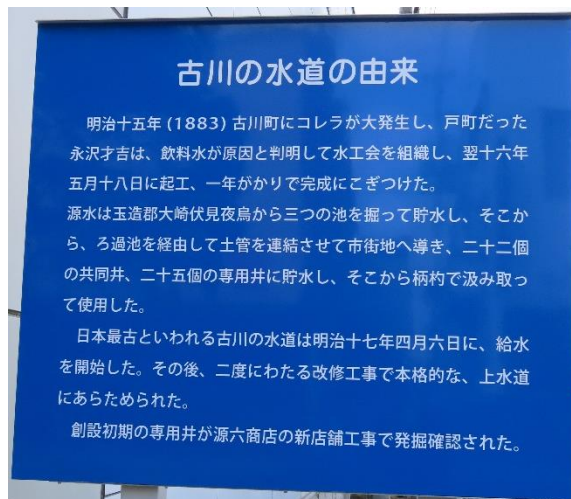
しかし改めて『水道100年のあゆみ』などの文献を読むと、根拠とした資料は『奥羽日日新聞』のリアルタイム取材記事であったことが分かりました。当時『奥羽日日新聞』はこの事業を丹念に取材し、記事として掲載していたのです。

永澤家の蔵に、近代水道敷設当時の生々しい原本資料が残っていたことは、大きな衝撃でした。事業推進当時に作成された書類の数々は、戸長であった永澤氏の手元にあり、役目を終えた時点で蔵に納められ、今回扉を開けるまで誰の目にも触れることなく眠っていたことになりました。かつての古川市史編さんの調査でも、残念ながら発見することができなかったようです。

永澤才吉が関わった水道関係や電信電話関係文書などがまとまって残されていましたが、残念ながら江戸時代から続いた永澤屋の商いに関わる古文書はまったく残されていません



「明治の上水道施設跡（東大崎の試験井戸）」を紹介する看板。東大崎地区歴史研究会の作成です。



「古川の水道の由来」を紹介する看板。大崎市古川台町に建立されています。台町の再開発工事の際に井側が発見されたことを記念して建てられました。

でした。しかし、旧古川市民、現在の大崎市民にとって、当時の関係者の苦心の跡や叡智の結晶を証言してくれる文書が失われず、救済できたことは幸いでした。

4. 資料紹介

本項では令和4年の展示会に展示した資料を改めて紹介します。

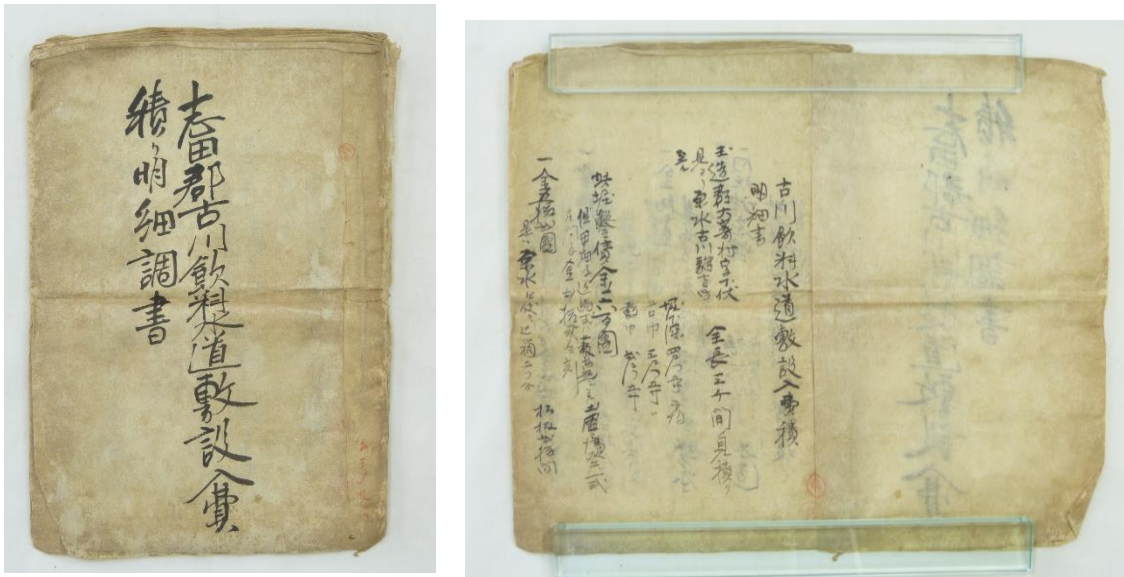
① 水工会頼母子掛金収入日計簿 明治16年(1883)6月29日 会計係



膨大な水道敷設工事費をねん出するため、戸長永澤才吉は「水工会」という頼母子講を組織し、有志328人を募って4,400円を調達した、とされています。この日計簿によると、頼母子は6月29日から翌年2月まで9回が行われました。

② 志田郡古川飲料水道敷設入費積り明細調書

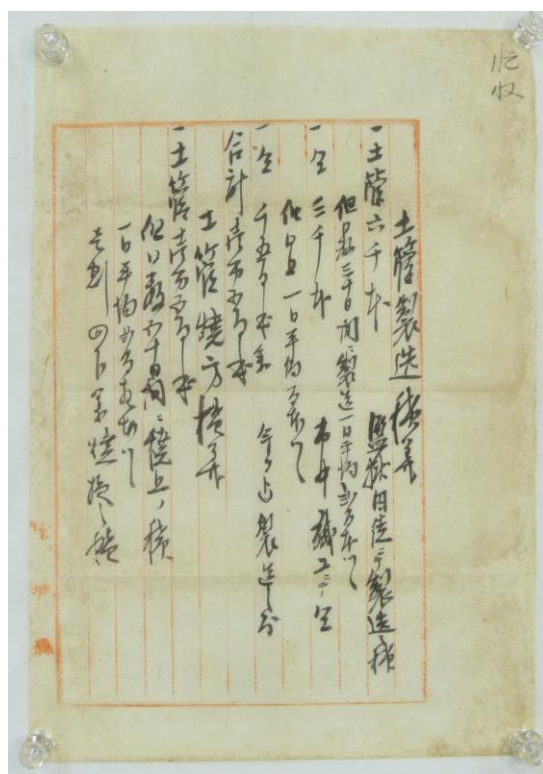
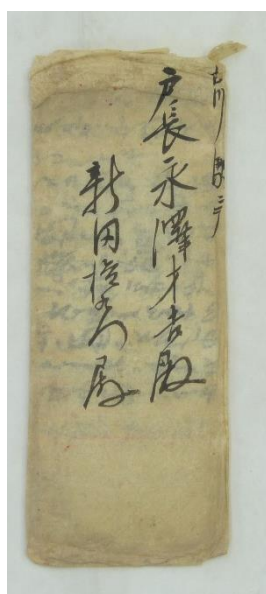
年代不詳(明治16年か) 請負人 佐々木丙吾



古川の水道の水源は玉造郡大崎村字下伏見に求められ、汲み上げた原水を古川駅七日町までの全長3,000間(約5,460m)の区間に通すための水道を敷設する経費見積明細書です。濾過機や検査樽の埋め込み費用など、合計1,897円59銭の見積もりですが、この中に土管の製造費用は含まれていません。

③土管製造積算 (明治16年7月4日)

渡辺儀助 → 戸長永澤才吉殿・新田権右衛門殿

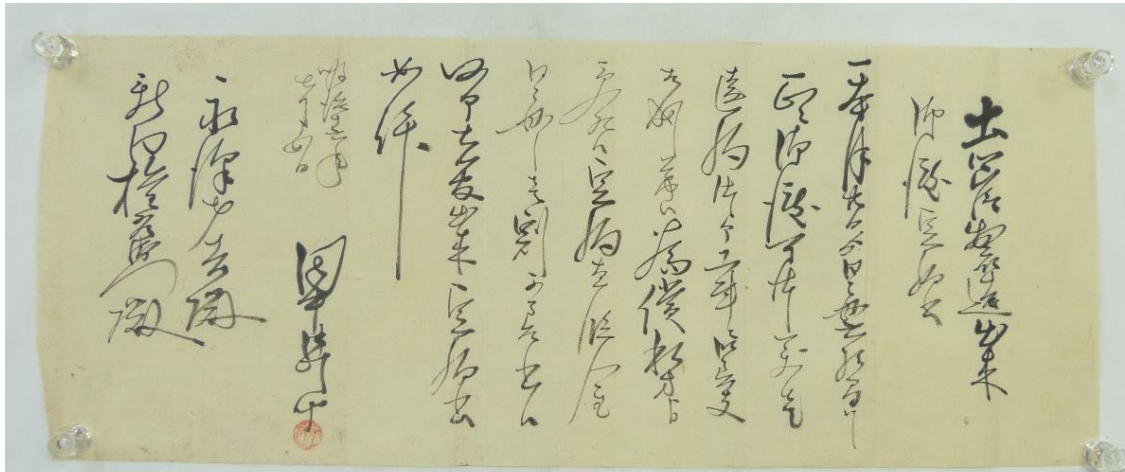


古川の水道敷設事業には宮城県からの技師が派遣され、焼いた土管を連結して給水管とする、という方法が取られることに決定しました。工事に必要な土管10,500本のうち、これから製造する6,000本を監獄囚徒に、3,000本を市中職工(仙台堤焼職工など)に製造させる予定であること、日数は50日間が見込まれることなどを知らせています。発信者の渡辺儀助は宮城県の土木課の技術者でした。

④土管製造出来御渡定約書 明治16年7月4日

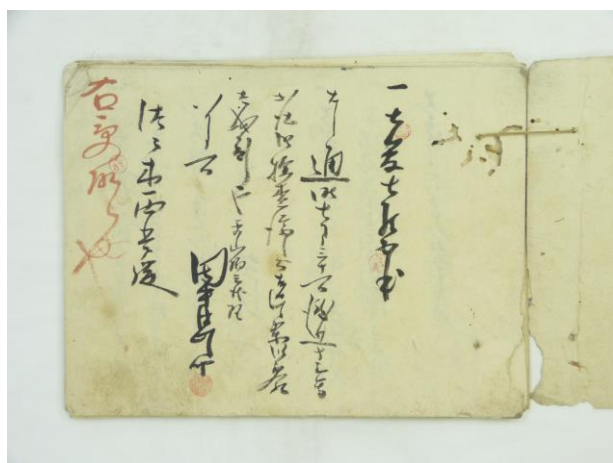
田中忠之助 → 永澤才吉殿・新田権右衛門殿

土管製造人の田中忠之助から提出された製造に関する定約書です。田中は平山陽三の代理人として製造工事にあたりました。平山という人物は宮城監獄の瓦製造技師として雇われていた人でした。



土管製造出来
御渡定約書
一 本月廿日より日毎六拾間ツ、
正二御渡可仕候、萬老
違約仕候而工事に御差支
相成候節ハ為償私方より
受合候定約直（値）段金
日毎二老割可差出候
仍て土管出来定約書
如件
明治六年
七月四日
田中忠之助
永澤才吉殿
新田権之助殿

⑤ 土管納簿 明治16年 平山（陽三）

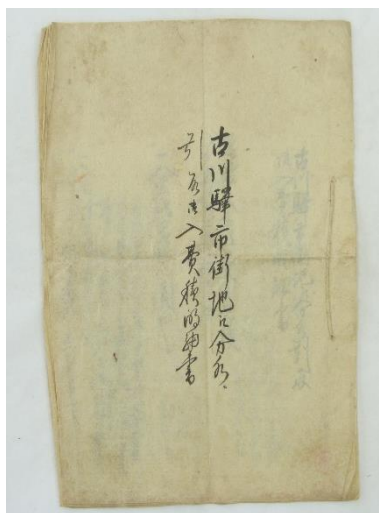


平山陽三は、岐阜県出身、宮城監獄で囚人たちに瓦の製造を教えていた人でした。この頃水道に用いる土管の製造がうまくいかず暗礁に乗り上げていたところで、県では平山を指導者に招き、囚人たちを使役して土管の製造を行うことになりました。この資料は、平

山の代理人として製造にあたる田中忠之助から工事請負人の佐々木丙吾に土管が納入された記録です。

⑥ 古川市街地江分水引候御入費積明細書

「線路長1, 200間之見積市街地溜井19ヶ所



一金貳百貳拾八円也」とあります。

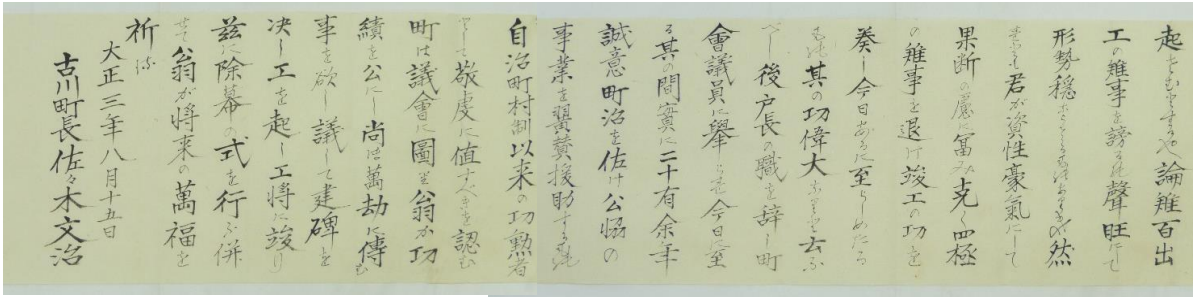
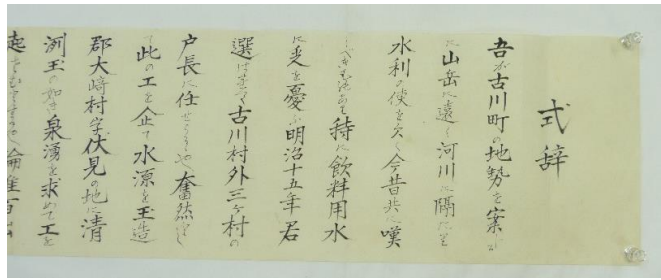
七日町「富士東商店」敷地から原型をとどめて掘り出された井側。現在は大崎市上下水道課の庁舎前に展示されています。





「紀功碑」

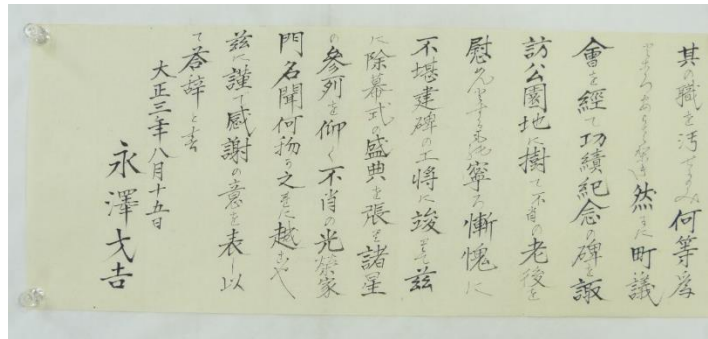
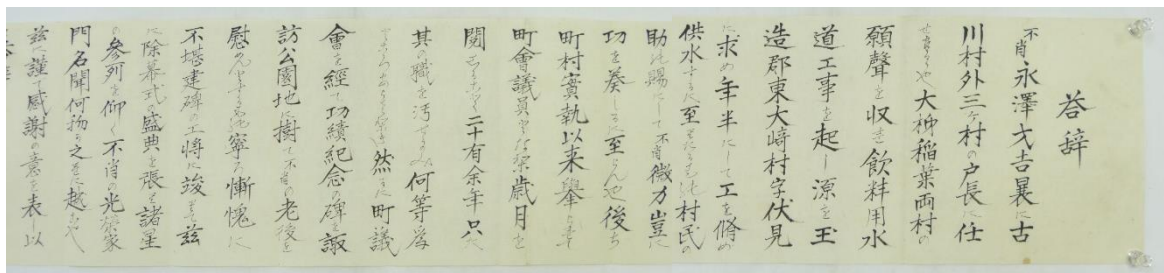
大正3年（1914）に、永澤才吉の功績を讃えて、古川町議会の決議のもとに建立されました。現在は大崎市上下水道課の敷地内に立っています。永澤家文書には、大正3年に執り行われた碑の除幕式における町長佐佐木文治の式辞と宮城県会議員佐々木吉四郎の祝辞、永澤才吉の答辞が残されていました。



⑦ 式辞 大正3年8月15日 古川町長佐々木文治

式辞
 吾が古川町の地勢を案じるに、山岳に遠く、河川に隔たり、水利の便を欠く、今昔共に嘆くべきものあり、特に飲料用水に乏を憂ふ、明治十五年君選はれて古川村外三ヶ村の戸長に任せらるゝ也、奮然として此の工を企て、水源を玉造郡大崎村字伏見の地に、清冽玉の如き泉湧を求めて、工を起さむとする也、論難百出、工の難事を誇るの声旺にして形勢穩ならざるものありき、然れども君が資性豪氣にして果断の慮に富み、克く四極の難事を退け、竣工の功を奏し、今日あるに至らしめたるもの、其の功偉大なりと云ふべし、後戸長の職を辞し、町会議員に挙げられ今日に至る、其の間実に二十有年余年誠意町治を佐け、公協の事業を翼賛援助するもの自治町村制以来の功勲者として敬虔に値すべきを認む、町は議会に図り、翁か功績を公にし、尚ほ萬劫伝む事を欲し、議して建碑を決し、工を起し、工將に竣り、茲に除幕の式を行ふ、併せて翁が将来の萬福を祈る

大正三年八月十五日
 古川町長佐々木文治



⑧ 答辞 大正3年8月15日 永澤才吉

答辞

不肖永澤才吉、曩(さき)に古川村外三ヶ村の戸長に任せらるゝ也、大柿・稲葉両村の願声を収(い)れ、飲料用水道工事を起し源を玉造東大崎村字伏見に求め、年半にして工を脩め供水するに至りたるもの、村民の希望と先輩有志の援助の賜にして、不肖微力豈(あ)に功を奏するに至らん也、後ち町村実執以来挙(あげ)られて町会議員となり、歳月を閲すること二十有余年只た其の職を汚せるのみ、何等為ところあらざりき、然るに町議會を経て功績紀念の碑を諏訪公園地に樹て、不肖の老後を慰めんとするもの、寧ろ慚愧に不絶(たえず)、建碑の工將に竣(おわ)りて、茲に除幕式の盛典を張り、諸星の参列を仰く、不肖の光荣家門名聞何物か之れに越(こ)也茲に謹で感謝の意を表して答辞とす

大正三年八月十五日

永澤才吉

5. 終わりに

旧古川町の水道工事は、明治16年に着手し、17年に竣工になりましたが、「土管を焼いて連結して水を流す」という、当時としては画期的な方法でした。古川町のみならず、当時の宮城県技術者の叡智を集めた誇れる事業だったと考えられます。そして資金を調達するために「頼母子講」を立ち上げて民間のお金を集めた、という永澤才吉の大英断にも感服させられます。未来に語り伝えたい「近代の夜明け」を証言する資料として紹介し

ました。

永澤家文書は今後の大崎市の歴史解明に大きな貢献をしてくれるものと考えています。

引用参考文献

- ・(株)大崎タイムス社編集局長後藤新平編集 『古川市水道百年の歩み』 古川市水道事業所発行 (昭和61年6月1日刊)
- ・古川市史編さん委員会編集 『古川市史 第2巻 通史Ⅱ』 大崎市発行 (平成21年8月31日)